

「私いな、モウお常はんが、言ふ時分やと思ふて、先に言ふたんや」

「阿呆やなア」

「お常はん、如何にしてゐるやろう」

「そうと、裏から見に行かう」

裏の堀の節穴から覗きますと、お常はん、喫驚した拍子に、狐の正體を現わして（鳴物らいじよ）

「クシヤン、今、清八喜六兩人の者の様子では、どうやら、狐と悟りし様子、怨めしいは、清八喜六

清八は城の濠、喜六は屎坪へ抛込んで、目に物を見せて遣る」

聽て、スヤ／＼と寝て居ります童子の枕許へピタと座りまして

「これ童子や、今此の母の言ふ事を、寝耳ながらに能う聞きや、吾こそは人間に非ずして、天神山にて千年近き狐ぞや、三年以前、其方の父保平殿に助けられ、その御恩を報いんと、これまで斯うして居たなれど、長家の人の言葉の端、吾を狐と悟りしうゑは、最早此家に長居はならず、母は古巢へ歸るぞや、名残り惜い保平どの、ウンせめて一筆書残さん、オ、そうぢや、そうぢや」

とお常さん筆をくわへまして、後方の障子へ

戀しくば 尋ね來て見よ 南なる 天神山の 森の中まで

と書まして、其まゝ天窓から消えて仕舞ました、これを見て居た兩人は、喫驚しまして

「フワイ、甚い事になつて來たで」

「清やん、何うなるね」

「何うなるて、今、お常はんの言ふた事を聞いたか、私は城の濠や、お前は屎壺へ抛り込むと言ふてたがな」

「清はん、私い、屎壺は嫌いや、今の間に逃げやうか」

「それが逃げられるもんか、道やと思ふてたら、屎壺へはまるね」

「そんな事を言ふたら、どないもでけんがな」

「餘計な事を言ふよつてにや、保さん何處へ行たんやろう」

「清やん、保さんが歸つて來た」

「オウ、保さんか」

「お前等兩人そんな處へへタバツテ何を仕てるね」

「保さん、甚い事が出來た、お前所のお常はん、彼れは狐やで、内の中を見てみ、障子へ何や書いて逃げて行たで」

「エツ、お常が障子へ、フン／＼成程

戀しくば 尋ね來て見よ 南なる 天神山の 森の中まで、